トピックス

Vol. 60-7～9 月号の本欄の担当者は，J・花嶋晴道，S・三浦尚，C・大内雅博の三委員でした．

ICE TECHNOLOGY J

これが真夏であればアイスクリーム製造技術のことかなと思われるかもしれないが，ここでは流氷の押しよせる季節を迎えた極北の地のお話。シベリア，スカンジナビヤ，アラスカ，カナダなど一年の大半を氷雪に閉じ込められて生活する地方では，氷との闘いが土木技術にとっても主要な課題である。氷のブロックを組み立ててつくるエスキモー式住居「イグルー」をひきあいにだすまでもなく，氷を建設材料に使おうというアイデアは古くからのものである。すでに，流氷を利用した観測・作業基地，空港，船舶着岸施設，橋梁なども成功裡に建設されている。今後，極地の資源開発ともからんで，構造用材料としての氷に関する技術開発にはこれら諸国は一段と力を入れることになりそうである。わが国の技術陣の応援も求めてきているともいう。

ところで話は変わるが，最近アメリカ合衆国の科学者が発表したところによると，シベリヤを流れる大河，オビ，エニセイからの淡水の流入をカットできれば，数年以内に北極海の無氷化がはじまるだろうという。オビ，エニセイの南流案は，かつて中央アジアの緑化とカスピ海の水位保持のために提唱されたことがあるが，今度は寒冷化におびえる地球の救済策として考えることもできるというわけ。土木技術のフロンティアの話題，いかがですか？

公共投資に横線を C

昭和 48 年秋の石油危機は終戦直後の混乱期を除いて，かつてないきわめて異常な物価高を招いたため，昭和 50 年度の当初予算は前年対比 102% と，昭和 49 年度に引き続いて総需要の抑制が堅持された。これは前年からの物価高を考慮すれば事業量では 70% 前後ときわめて異常な状況である。

このことは，世界的なインフレに続く景気の落込みによる税収の減と，物価抑制のためによるものであろう。これは，世界的に経済が安定成長を指向しているため，かつてのような高度成長を期待することはできないことなどによるものと思われる。加えてわが国の福祉水準は西欧先進国に比して，きわめて低いため，農林省の例では昭和 51 年度の概算要求も前年対比 23% 増（他省は 15% 増以内）にみられるように，福祉関係予算は大きな比率を占めてくるであろう。このような状況のもとでは公共事業関係の予算は，かつてのような大幅な伸びは期待できないものと予想される。

高度成長時代の公共事業はそれぞれの分野で独自に進められてきた。このことは道路の同じ地点が何回も掘り起こされ，そのつど施行主体が変わることでも明らかである。これからは各分野の中はもちろんのこと，各分野ごとの横の調整を十分に行って，貴重な財源の有効な投資が行えるよう検討すべきではなかろうか。

自然への敬慕 S

先日のラジオ放送によれば，かなり多くの医者がアンケート調査で人体構造の素晴しさ，また神秘性に何か＜人間の力を越えた存在＞を感じると述べたという。また，アルバート・アインシュタイン博士も，「おぼろげにしか理解できない宇宙の驚くべき構造を思いめぐらすとき，自然のうちに示されている理知の微少の部分を理解しようと謙虚に努めるだけで私にとって十分である」と述べておられる。そこで閑筆。

われわれ，自然と日々接している土木技術者も自然のメカニズムの美しさ，微妙さに心を奪われるような多くの経験を持っている。しかし，急激な高度成長は，われわれに技術万能の錯覚を与え，自然の微妙な営みを考えるゆとりもなく自然と対応してしまったのではないだろうか。

そのため，災害の増大，環境破壊，それに伴う人心荒廃といった，まさに自然のシッペ返しを受けているような状態である。土木技術は自然との調和のとりにくい面もある。しかし，それに甘んじ，人間の欲望のおもむくまま開発が許されるとしたら現在の状態は改善できない。われわれの心も落着きつつある今，人間が自然に対して無知無力であることを理解し謙虚をもって受けとめ，自然と調和のとれた土木への新たな出発点とする必要があろう。